

牧口常三郎の学習経済論

坂 本 幹 雄

小論は、牧口常三郎が多用した学習経済論の特質と背景とを明らかにする。特に1919年に牧口が参加した学習経済論プロジェクトの概要および牧口自身の論文に焦点をあてる。これは時期的には1916年の『地理教授の方法及内容の研究』と1930年の『創価教育学体系』第1巻の間であるから、小論は牧口の中期思想研究、とりわけ中期の学習経済論を中心とした研究ということになる。牧口（1982b：413）が自身の「この隠忍の二十年間」と述べている期間、斎藤正二（1984b：504）が牧口の「思索的沈潜期」と呼ぶ期間を含む。

1. 小論の構成

まず学習経済・思惟経済の特質について、経済学徒として一言する。次に牧口の初期と中期の主要著作における学習経済論の展開を取り上げる。そして学習経済論の日本への流入について確認し、学習経済論の隆盛を示す1919年刊行の論文集『学習経済論』の概要を示す。その中には経済学に関連した論文が2本（紀平 1919：31-44、城戸 1919：115-150）あるから、これを別途取り上げる。最後に同書に収録された牧口論文の概要と特徴を示す。まとめとして牧口の学習経済論から創価教育学への流れを確認する。以上によって学習経済論の観点から牧口 of 思想と学説の形成と特質を把握する一助となることを期したい。

2. 「科学は知識の経済なり」

牧口は「科学は智識の経済なりと云ふ学問の理想」（牧口 1981b：162）¹⁾、「真理の極点は一であり、科学は智識の最も経済的に整理せられたもの」（牧口 1981b：165）、「西洋の諺に科学は知識の経済なり」（牧口 1982b：376）等と述べながら学習経済論を展開している。科学の経済原理といえばエルンスト・マッハの「思惟経済」が真っ先に想起される²⁾。斎藤正二は、『創価教育学体系』第1巻に言及しながら、牧口がマッハの思惟経済に関する文献を知り得ていたと次のように述べている。

「……田辺^{はじめ}元の『科学概論』や『今日の自然科学』(ママ)を見ますと、すでにマッハの思惟経済について書かれています。それは、ちょうど牧口の発言と同じ時期であるし、牧口がそれを読んでいただろうと推定できます。」(斎藤 2010 : 717)

大胆な「推定」である。ちなみに『最近の自然科学』は1915年、『科学概論』は1918年にいずれも岩波書店から刊行された(下村 1963 : 665, 668)。後述の1919年刊行の牧口が寄稿した『学習経済論』の中にはマッハに言及した論文(稲垣 1919 : 81-83)があり、こちらの方がより確実に斎藤の論拠となるかもしれない。しかし小論は、現時点では不明としておきたい。

その他の類似概念としてオッカムの剃刀等も想起されるところだろう。しかし小論では、やはり経済学徒としてアダム・スミスを引用し、その特徴の一端を示したい。

スミスは「天文学史」の中で「哲学は自然の結合原理の科学である」、「哲学」は無秩序な対象を結びつける「見えざる鎖を示す」等と述べて(Smith 1981 : 45, 訳25-26)³⁾、想像力理論を駆使しながら古代の体系からニュートン体系に至るまでを辿っている。

そしてスミスはニュートンについて『修辞学・文学講義』の中で次のように述べている。

「……自然哲学またはその種の他の学問において、われわれはアリストテレスのように、さまざまな部門を、それらがわれわれの前にたまたま起こる順序に従って入念に調べ、あらゆる現象に対して通常は新しいものである1つの原理をあたえることができるし、あるいはアイザック・ニュートン卿のやり方で既に知られているか、初めに証明された一定の原理を提示して、そこからわれわれは、さまざまな現象をすべて同じ鎖によってつないで、説明することもできる。ニュートンの方法と呼んでもいい、この後者は、疑いもなくまったく哲学的であり、良俗論であれ自然哲学等々であれ、あらゆる学問において、前者に比べて大いに創意があり、その理由で魅力がある。それはわれわれに、われわれがもっとも説明できないと見なしている諸現象を、すべてある原理(ふつうはよく知られている原理)から引き出され、すべて1つの鎖でつながれているものとして、見る快楽をあたえる。」(Smith 1983 : 145-146 訳250-251)

スミスは以上のようにアリストテレスの方法と比較して、既知の原理から諸現象を演繹的に説明するニュートンの方法(デカルトの方法⁴⁾)の優位性を説いている。

さらにスミスは『国富論』では、このニュートンの方法・自然科学の方法が道德哲学（社会科学）に適用されるものであるとの見解を次のように示している。

「日常生活の格言は自然現象を配列し、結び付けようと試みたのと同じやり方で、ある組織だった順序で配列され、少数の共通原理で結び合わされた。そうした結合原理を探求し説明すると自任する科学が、道德哲学と呼ばれてしかるべきものなのである。」（Smith 1976：2：769 訳4：30）

以上、スミスの科学方法論の中にも少数原理という類似概念があることを示した。

ところで前述のように牧口は「西洋の諺に科学は知識の経済なり」（牧口 1982b：376）等と述べていたが、牧口の学習経済論を含む教育理論は、斎藤（2004：516-517、2010：54-60）によれば、ジェームズ・ジョホノットの知識経済主義を含む教育理論から大きな影響を受けて形成されたものである。ここで興味深い点は斎藤が次のように解釈している点である。斎藤（2004：589）は、ジョホノットの『教授の原理と実際』の背後にはスペンサー『教育論』他、その背後にはミル『自由論』と『功利主義論』、その「背後」にはベンサム『道德および立法の諸原理序説』、そしてその背後にはスミス『国富論』があると述べている。ここから斎藤はジョホノットとスミスを結び付け、さらにスミスと牧口を結び付けて次のように述べている。

「ジョホノット教育学理論はアダム・スミス経済学理論の嫡孫に当たる。……牧口常三郎『創価教育学体系』の基本パラダイムは、その源泉まで遡^{さかのぼ}っていくと、アダム・スミス『国富論』……に到り着かざるを得なくなる。……牧口教育学パラダイムをそれからそれへと遡^{そこう}行して尋ねていくと最後には必ずアダム・スミス教育学理論に突き当たるはずである……」（斎藤 2004：589）

斎藤は『国富論』第1編の分業論・教育論を引用して、結局、次のような大胆な踏み込んだ結論を述べている⁵⁾。

「……スミス理論を正しく理解し^{おお}畢^{おひ}せていた地理学者・教育学者＝牧口常三郎のごとき稀少の例証を、^{とうと}尊^{たうと}まずにはいられない。牧口の平和・反戦思想も直接的にはスミス自由主義経済理論の薫陶^{くんとう}下に生まれたのであった。」（斎藤 2004：596）

小論のスミスからの引用は、以上の斎藤の主張とは直接関係はない。また小論は、斎藤の主張と矛盾するわけでもないが、斎藤の主張を裏付けているものでもない。ただし引用した『国富論』の一節は、第5編の教育論・大学論の中にある。現

段階では、繰り返しになるが、経済学徒として、スミスの中にみられる類似概念としてあげてみたものである。ちなみに牧口がやはり大きな影響を受けたJ・F・ヘルバルトの類化論と比較してみることはできるかもしれない。

3. 初期・中期の主要著作における学習経済論

1903年の『人生地理学』初版、第32章「地理学の研究法」において、牧口は地理科学の研究方法論を展開し、次のように経済原理を強調している。

「吾人は右の如くして成立すべき科学的智識を正しく得る手段を得んが為、及び之を収得するに当りて最も経済的（最少の労力を以て最大の量を得る）手段を得んが為、及び斯くの如くして収得したる智識を最も永く記憶し、且つ他日其智識を応用する場合に於て最も確実に、最も迅速に取り出すことを得べき手段を得んが為に、及び此等の手段を用ふるに当り、最も心力を経済的に利用する上に於て、吾人は斯学に於て尚ほ研究法を講ずべき幾多の必要の存するを見る。」（牧口 1996：420-421）

これを引用した斎藤（2010：560）は、『人生地理学』が「到達した思想主題」とみている。1908年の『人生地理学』訂正増補第8版（牧口 1908：1072）にも用例が見られる。第2作の1912年の『教授の統合中心としての郷土科教育』で多用されるようになり、第3作の1916年の『地理教授の方法及内容の研究』ではライト・モティーフとなり、「大交響曲」（斎藤 2010：562）となっている。この主著3作の学習経済論については斎藤（2010：559-571）がすでに網羅的に引用している。経済学徒としては屋上屋を架してでも引用して再構成してみたいが、全面的には別の機会にしたい。小論では牧口論文が収録された緊急出版の「臨時増刊」、1919年の『学習経済論』を中心に学習経済論の隆盛と牧口の中期思想に焦点をあてたい。

4. 学習経済論の流入

学習経済の「精神」は、小西重直（1912：215-216）によれば、「比較的新しい意味に於ては明治初年」にすでに見られる。1876年に藤野善蔵訳として「米国教育局」の報告の中にあるマサチューセッツ州ウイリアムス大学の「学頭」「ビー、エー、チャットポール」の演説「教育を施すに勤労の浪費することを論ず」（1874年）が『文部省教育雑誌』第20号に掲載された。

しかし当時の学習経済論はエルンスト・モイマンの『記憶の経済と術』（1904年）の流入により盛んになっていったらしい（小西 1912：215、218、富士川 1919：189-

190、小西 1919 : 201、渡部 1923 : 314)。これには乙竹岩造がかなり大きな役割を果たしていたようである。たとえば乙竹の1909年の著作『新教授法』の中に「学習経済論」(乙竹 1909 : 282-310)と題する1章があり、モイマンが紹介されている。渡部政盛(1923 : 321)によれば「我が国に於ては乙竹岩造氏が一時しきりに学習経済論を唱えた。但しそれは固より言ふまでもなくモイマン教授等の説の翻案である」。また渡部政盛(1925 : 607)によれば「日本の学習経済論はモイマンの学習経済思想を継承したものである。そして逸はやくこれを翻案したものは乙竹岩造氏である」。さらに稲垣末松(1919 : 78)によれば「我が国に於て学習経済なる語が初めて使用せらるゝに至つたのは、かの「モイマン」氏の実験教育学がこれを実験的に測定、その測定結果が我が国に紹介されてから」である。次に取り上げる1919年の論文集『学習経済論』でもモイマンが多く論じられている。

なお牧口の学習経済論はモイマン由来ではなさそうである。前述のように斎藤(2004 : 517)によれば、牧口は若き日にジョーホノットの教育学の知識経済主義の教授理論から影響を受けた。牧口のモイマンへの言及は今のところ見当たらない。

5. 学習経済論の一大論文集

1919年(大正8年)、教育論叢編集部編纂『学習経済論 一名 教育能率の増進に関する研究』(文教書院)が刊行された。

まずサブタイトルの「教育能率の増進」に関しては、斎藤も注目しているから、この点に少し触れたい。斎藤(1984b : 504)によれば、牧口の1926年の「教育者は教育能率の増進に大に努力しなければならぬ」(牧口 1984 : 323)というスローガンの提示は、このサブタイトルからの影響と見られる。さらに斎藤(1984a : 454)によれば、「大正デモクラシー期の半ばごろから、第一次大戦後の世界的風潮となった“産業の合理化”の合言葉を背景に、日本の教育界においても、かなり広く「学習能率の増進」をめざす動きが見られていた」。要するに、斎藤(1984b : 504)によれば「教育能率の増進」の術語は、「大正中期自由主義教育理論」の「素地」=「ゲシュタルト」となっていた重要概念である。

さて『学習経済論』は、総論として16本、各論として7本、合計23本の論文集である。各論は、保健・理科・地理・歴史・国語・算術・修身の7科目からなる。そして地理担当はもちろん牧口である。

「序言」は編集部代表の河野清丸が担当している。河野の現状認識によれば「児童の心意活動や教材の性質等、教育の根本問題に迄応用の歩を進むるが如きに至りては、余寡聞未だ多く聞知する所がない」状況にある。「諸先生も亦問題が焦眉の急にして且つ着実なる研究なりとせられ」本書が実現した。

それではまず執筆者とタイトルを原著には章の番号がないので、便宜上、番号を

付して示す。

総論

1. 大瀬甚太郎「学習法概論」
2. 紀平正美「経済の概念」
3. 野上俊夫「学習経済の根本問題」
4. 小林澄兄「学習経済論」
5. 稲垣末松「学習の経済に就いて」
6. 谷本富「学習経済の新研究二・三」
7. 城戸幡太郎「教育価値論」
8. 日田権一「教育上より見たる学習作用の意義及び其の基本型式を論ず」
9. 富士川游「学習の経済」
10. 小西重直「学習経済の疑義」
11. 高峰博「学・習・教と子・家・師との問題」
12. 及川平治「動的教育と学習経済との関係」
13. 藤岡勝二「経済の観念」
14. 青木誠四郎「注意と学業成績との相関関係について」
15. 久保良英「学習に関する実験的研究法」
16. 田中寛一「経済的学習の一条件」

各論

17. 氏原佐蔵「学習経済と保険問題」
18. 大島鎮治「理科教授に於ける学習経済問題」
19. 牧口常三郎「学習経済より見たる地理教授の改造」
20. 中村久四郎「歴史教育及び学習につきて」
21. 水戸部寅吉「国語科の学習経済」
22. 生駒萬治「算術科の学習経済」
23. 北澤種一「修身科の学習経済」

濃淡はあるが前述のモイマンには7本が言及している⁶⁾。

執筆陣は当然、教育学者・心理学者・現場の教育者が中心であるが、医学者等のその他の専門家も参加している。佐藤秀夫(1982b: 454)によれば、執筆陣のうち大瀬・紀平・小西・谷本・及川が「大家」であり、城戸・青木・久保・田中等が「新進」学者等である。当時の大家であったとかまだ新進であったとか、そうしたことは関係なく、ここではもちろんその内容を問うことにしよう。そうすると重厚な内容のものから覚書程度のものもあり、濃淡がある。もちろん牧口論文は重厚な内容であるから取り上げるわけである。斎藤(2010: 570)は、牧口論文に関して

「大正デモクラシー期教育思想界の歴^{おれき}歴^{れき}人に伍^ごして毫^{ごう}も遜色なき論陣を張ってみせている」と評している。

さて以下各論文の内容・特徴を確認していこう。まず「総論」。冒頭の2本はいきなり学習経済論に批判的である。大瀬（1919：29）は、学習は「情緒及び意志上の問題」であり「学校の学習能率も子弟の関係、校風、社会の要求等に関係する所が甚だ多い」として学習経済論に偏ることに批判的である。紀平は本書の中で学習経済・思惟経済に最も批判的であるが、スミスと経済学に言及しており別途後述しよう。野上（1919：59）は「心身の発達と学課目及び進度の問題」と学習経済論との連携による「根本」的取り組みを主張している。小林はモイマン説に従う。稲垣はアベナリウスとマッハの思惟経済に言及している。谷本は学習経済として古くからのことわざやラトケやコメニウスの名をあげているが、中心はフランク・フリーマンの学説の紹介により展開されている。城戸の教育価値論は経済学に接近しており別途後述しよう。日田はモイマンの他、E・A・カークパトリック、E・L・ソーンダイク、デューイ、ヘンダーソン等の学説を紹介している。富士川は参考文献紹介の簡潔なものである。小西は、小西（1912：222-226）同様、モイマンの学習経済論を狭すぎるとして学習経済＝教授経済を強調している。高峰は精神疾患等の記述が多い。及川は「書籍の使い方」や「ノートブックの使い方」等、具体的に「経済的学習の輔導」を述べている。藤岡は教育にも学習経済にも直接言及せず、議論の際の留意点を述べるだけである。青木と田中は実証研究、久保は実証研究の方法論の内容となっている。

以下、後述の牧口を除く「各論」である。氏原は保健衛生の問題の他、女子教育にかなり言及している。大島は理科「教材」「教授」「設備」「制度」と学習経済の関係を論じている。中村は歴史教育の「能率の増進」について留意すべき点を述べている。水戸部は国語の「読方」「綴方」「書方」の諸問題を具体的に考察している。生駒の算術は本書の中で最も短いものである。北澤の修身は担当者病気による急遽の代役（北澤 1919：485）であるが、充実した内容となっている。

6. 紀平正美の国家主義論—学習経済論の棄却

紀平（1919：36-37）は、「協力と分業とによつて組織立てられた一団体の成立原理」という経済原理にスミス『国富論』の分業論の意義を認めつつも、「批評の原理、経済運用の原動力」には「歴史」を「必須条件」として追加すべきであると強調している。紀平（1919：41）によれば、その「批評の原理」は「三千年の歴史を有し、儒と仏即ち世界に大文化の源泉の二をも既に綜合し得た我が国家」とすべきである。西洋の個人主義や経済学よりも日本の歴史に則った「国家的生活」「国家的自覚」「国家組織の根本原理」を優位としなければならない。

こうした国家主義志向から教育に関しても次のように主張している。

「……教育が対人格の問題であるならば、教育の事業を経済的にやるといふ事は、人を機械視することで、其れ自ら矛盾すること、云わねばならぬ。従て教育に於ける経済とか能率を高めるとか云ふ事は、物的の能率の場合の如くに考へてはならぬ。国家的生活に本く徹底的方法論と考へなくてはならぬのである。」(紀平 1919 : 42-43)

結論として「国家的自覚のみが教育上の経済問題を解決する原理である」(紀平 1919 : 44) と説き、学習経済論は棄却されている。

7. 城戸幡太郎の教育価値論—経済学への接近

城戸 (1919 : 117) は「学習経済は教育価値の一方面となり得る者であるといふ理由の下に」「教育価値の一般論」をテーマとして掲げている。しかし3分の2近くがリッケルトやナトルプ等に言及しつつ科学方法論が延々と展開されている。教育学に入っても学習経済にはなかなか進まない。しかし意外にも以下のように経済学へ接近してくる展開がみられて、経済学徒にとっては興味深い論文となっている。教育の効率性は全体のテーマであるから、そういうことではなく、もちろん城戸もこの点は踏まえていくのであるが、それ以外に経済学へと接近してくる感があるという意味である。

城戸 (1919 : 146) は左右田喜一郎の「評価社会」を「社会的教育学」・「教育的社会学」の「一種の改造原理」として考えたものとみなしている⁷⁾。左右田に言及してそうなったのか、当初から左右田を想定していたのかはわからないが、ともかく本書の中ではおそらく唯一、経済学の価値論・教育経済学の分野へと接近してくる感がある。

城戸は次のように述べて議論を始める。

「……教育の目的と方法とに於ける優劣の価値である、歴史的事実が改造原理として考へられる時には、歴史一般としての社会生活に適応すべき個性の陶冶といふことが教育の目的となつて、其の統制原理としての教育価値は一般に有用 (Nützlichkeit) となる、……有用が真理を規定し得ないと同様に教育価値に於ても優劣は必ずしも有用に規定されるべき者でない、」(城戸 1919 : 146)

城戸によれば、ナスやカボチャが優秀な品種と判断されても、それは本来有用に帰すべき判断であって、「経済価値」に属すべきであって「教育価値」に属すべき

ではない（城戸 1919：146）。教育に「有用」・「経済価値」を持ち込むとどのようなことになるのか、城戸は次のように説いていく。「優劣が其自身に於て絶対の価値を保持するためには、其は自由なる意志を有する自覚的我に於てのみ妥当し得る価値であつて、此の人格的個性を無視した優劣の判断は結局人をして人のために存在せしめ」るものになってしまう（城戸 1919：146）。人をナスやカボチャと「同一視」して「経済価値」の対象に帰してしまふことになる。城戸は「個人は社会のために」あるわけではなく、「社会は個人の自覚的發展を完成するために」あると見ている（城戸 1919：146）。結論として「人が財にあらざる限り、教育効果の大小は社会に対する有用の価値から判断されるべき」ものではない、あるいは「教育の効果は社会のための有用といふ見地から観るのは、人を財として取扱ふ教育の経済的価値観である」とされる（城戸 1919：146-147）。

この後、城戸は貨幣と「評価社会」という左右田のタームを入れ、ようやく学習経済論とリンクさせて次のように述べている。

「教育の能率なる意味が有用に対する効果の大小から考へられる時には、教授も学習も社会生活を経済的に活動せしむる手段に過ぎなくなり、教科が授業と学力とを評価する貨幣の如き媒介概念となつて、社会のために有利なる教科に還元せらるゝにあらざれば学力も授業も価値を有せざるに至るのである。授業一時間の価と学力一点の価とが評価社会によつて貨幣たり得る限り、教育者も被教育者も其の価値は経済的貨物に過ぎぬのである。経済的能率を増進せしむるための学習経済は最小の時間と労力とを以て最大の効果を獲得することであらう。然らば学習の能力即ち教育可能性なる者は貨幣に還元せられる程度によつて其の大小が測定されねばならぬであらうか。単に一定の価値によつて判断される教科の内容のみにては教育価値とはなり得ない……」（城戸 1919：147）

城戸は、以上のように問いかけ、「教育価値」には「発達」・「陶冶」の概念が必要であると強調してこの議論を終えている。前述の大瀬の学習経済批判と重なるところもあるかもしれない。

8. 「学習経済より見たる地理教授の改造」

前記『学習経済論』の論文集への参加は、1916年『地理教授の方法及内容の研究』の3年後、第1次世界大戦が終わった約1年後、牧口の中期思想の内容を示すものである。後期『創価教育学体系』の樹立へと至る途上の論文である。以下にその概要を示していこう。

目次は「一 緒言」「二 教授の目的」「三 教材の選択」「四 教材の排列」お

よび「五 教材の取扱」（牧口 1919：378）の5つの節からなっている。

「緒論」の冒頭、牧口は第1次世界大戦後の世界と日本の現状に関して次のように述べている。

「世界的大戦争の帰結として、外は国際聯盟といふ国家関係の改造、内は国内に於ける資本家対労働者等の社会的階級間の関係改造、更に下つては其内の各社会的団体間、若くは団体内に於ける各個人間の生活関係の改造等、今や世界の総ての点に改造の声が盛んになつて来たに就いては、吾々の国民として将た個人としての位地が従来とは非常に変化して来たのである。これに伴つて吾々の生活関係の範囲は非常に広くなつて来て其の日常衣食住の生活状態が直ちに世界の波瀾に影響される事となつたと共に吾々の一挙一動が又直接、間接に忽ち世界に影響を及ぼすことともなつたのである。」（牧口 1919：379：牧口 1982b：369）⁸⁾

このような現実認識からスタートする牧口の姿勢は『人生地理学』初版以来からの特質である。またこのようなグローバリゼーション認識の表明は『学習経済論』の執筆陣と一線を画すものである。ともかく牧口はこのような現状認識を示し、地理学の必要性を次のように説いている。

「そこで吾々は世界を其生活舞台とする、欧米各国の国民と同等の立場になつたので、何人も世界を舞台として活躍して居る世の中になつたのであるから、この生活舞台たる世界を研究対象とする地理学の必要なることは、最早何人にも了解し得ることであらう。」（牧口 1919：379：牧口 1982b：369）

第2節「地理教授の目的」では旧態依然とした地理教授を改造するために目的の代案を提示している。まず小学校令施行規則第6条は次のようになっている。

「地理は地球の表面及人類生活の状態に関する知識の一斑を得せしめ又本邦国勢の大要を理解せしめ兼ねて愛国心の養成に資するを以て要旨とす」（牧口 1919：381：牧口 1982b：371）

牧口はこれを批判して次のようにもっと重厚な代案を提示している。

「地理は人類生活の状態と地球の表面との相関係せることに依つて現はる、知識の一斑を得せしめ、之に依つて本邦国勢の概要を理解せしめ、又社会の有機的生活を了解せしめ、之に適応して円満に社会的生活を遂げしめ殊に愛国心の養成に資するを以て要旨とす」（牧口 1919：382：牧口 1982b：371-372）

要するに「社会的生活」に役立つための地理を主張している。

第3節「教材の選択」では国定教科書の生活に役立たない「不経済」性を批判して次のように提案している。

「地理教科改造の第一としては人生との関係の有無多少に依つて教材の値打を判定して之を取捨選択して地理教科書を改造し、さうして生徒の学習経済に取掛らなければならぬと考へるのである。」(牧口 1919 : 385 : 牧口 1982b : 374)

第4節「教材の排列」はさらに国定教科書を徹底批判し、次のように「排列法の改造」を提案している。

「西洋の諺に科学は知識なりといふことは大に此科教材排列上に必要のことであると思ふ。学習力及び教授力の使用上の経済は教科の排列を科学的にして之を編制するのでなければ行はれるものではない。単に偶然の排列若くは不秩序の排列、不統一の排列では、之を学ぶものに同じ心力を使はせて其結果が非常に悪くなるのである。之に反して若し科学的順序に秩序整然と而かも統一をなして種々なる知識がそれぞれの価値相応に排列され、而して先きの学習した知識が後に出て来る所の物を了解する基礎となり、応用されるものとなり、後に出て来る知識が先きの知識に依つて自から理解されるといふことになるといふ様になるなれば、生徒の心意に初めて統一したる知識系統が出来、之を記憶するにも又理法を発見するにも容易になり結局学習力が非常に経済になる訳である。」(牧口 1919 : 387 : 牧口 1982b : 376)

現状の地理は「千遍一律の断片的知識の屑」「秩序もなき寄せ集め」状態である。「生活上実地必要の知識」が要求されるものであり、「人生地理学」が優先されなければならない。牧口はこのように主張して次に排列方法について説いている。

「旅行体」のような最悪の「総合的排列法」は「どうしても学習経済から見て排斥」しなければならない。牧口はこのように説いて、「教材の排列」の「演繹的順序の分解的排列法」の採用を次のように主張している。

「科学的排列法を採用するにはどうしても分解的に初めに一般に亘る概念原理を先づ挙げて、各国地方特有のものを其後に排列しなければならない。」(牧口 1919 : 391 : 牧口 1982b : 379)

牧口はさらに人生地理学から進んで郷土科に焦点を当て自著の参照を求めている

る。最後に地図に焦点を当て、次節に移っている。

第5節「教材の取扱」は学習経済の観点から地図本位論が詳細に展開されている。「地理教科に地図といふ便利なものがあるが為に、吾々の学習経済に非常の利益を為して居る」（牧口 1919：398：牧口 1982b：385）、「実に地図は最も便利なる而して経済なる地球表面の説明用具で、一枚の紙の中に種々なる記号を以て無数の概念原理を綜合すべき材料が圧搾して現はれて居るものである」（牧口 1919：399：牧口 1982b：386）、「地図を理解するといふことを以て教授の最も主要の作業」（牧口 1919：401：牧口 1982b：389）等と述べている。前述のように第4節でも言及されており、実際には地図本位論に半分近くの紙幅があてられている。

以上、牧口論文の概要をまとめてみたが、1916年の『地理教授の方法及内容の研究』の「地理学通論」の簡略版・要約版・コンパクト版といってよい内容であった。

牧口は「緒論」の後半で地理を含めて「学習経済上より各教科を研究する」企画に賛同しながら、教育全体について次のように述べている。

「総ての教科に亘つて学習経済を図ることは刻下の最も緊切の問題と思ふのみならず、今一步其範囲を拡げて教育の経済即ち教授力、学習力、費用、時間、言語等の経済に向つて教育法を改良するといふことは実に必要のことで、教育学が如何にかして此点に改良されなければ吾々教育者の実際の生活に殆んど没交渉になつて居る状態の改まることはないとは私は痛切に考へて居るものである。」（牧口 1919：380：牧口 1982b：370）

さらに1921年の「綴り方教授の科学研究」では、「教育経済」というタームで次のように述べている。

「余は単り綴り方の教授ばかりでなく、他の総ての学科の教授の種々なる方法の最終の判決を与ふる標準は教育の経済であると信ずるが故に教育目的の概念中に経済といふ一条項を加へなければならぬと思ふものである。」（牧口 1982b：407）

これもまた牧口の学習経済論が後期の『創価教育学体系』へと続く途上のものであることを示す傍証となる一節である。

9. 学習経済論から創価教育学へ

牧口の学習経済論は最終的に創価教育学の中に吸収されていく。あるいはその学習経済論は創価教育学の支柱の1つとなっていく。『創価教育学体系』は教育の経

済を強調してやまないが、「新教育学建設のスローガンの提唱」に際して次のように述べている。

「経済的教育とは教師の教授能力、児童の学習能力、其の他種々なる教育全般に無駄のないと言ふことである。教師の学習した結果が、その職業に役立つと云ふことは、児童の教育に経済的であるといふことで、即ち学習力の経済であると共に、教授力の経済であると云ふことを意味し、これが教育学研究の最も重大なる原動力であらねばならぬと思ふ。」(牧口 1982a: 26-27)

そして「新教育学建設のスローガン」が次のように高らかに宣言された。

「……余は余の教育学者に否、全教育家に向つて、新教育学建設のスローガンを提唱したい。／経験より出発せよ。／価値を目標とせよ。／経済を原理とせよ。／学習力に於て、教授力に於て、時間に於て、費用に於て、言語に於て、音声に於て、常に経済原理を旨とし、文化価値を目標として進め。／天上を仰いで歩むよりは、地上を踏み占めて、一步一步進め。」(牧口 1982a: 27)

これが牧口学習経済論の最終形態である。この3つのスローガンに関して、さしあたって熊谷一乗(1994)と斎藤正二(2010)の解釈をみよう。熊谷(1994: 71-72)は「価値を目標とせよ」と「文化価値を目標として進め」から「価値」と「文化価値」の相違について切実な感じで論じている。しかし単に「スローガン」として二字熟語に揃えているから、その後、補足しているとみたい。斎藤(2010: 654)は、「いずれもカント主義を念頭に置いて提唱されたもの」であり、「そう解釈するのが自然と言えよう」と推察している。また斎藤(2010: 667)は各スローガンに関して、次のように特徴づけている。第1スローガン「経験より出発せよ」はヘルバルト、第2スローガン「価値を目標とせよ」は新カント派、第3スローガン「経済を原理とせよ」は左右田喜一郎を「きっかけにして生まれた」と推察している。しかし上記の引用から察せられるように第2スローガン「価値を目標とせよ」は熊谷(1994: 71)が指摘するように左右田喜一郎⁹⁾、第3スローガン「経済を原理とせよ」は学習経済論の帰結と見る方が「自然と言えよう」。

以上はともかく斎藤は次のようにも述べている。

「創価^{アルファ}教育学の出発であり終点である思想主題は「学習の経済」「心力の経済」「身体労苦の経済」というに尽きます。」斎藤(2010: 51)

この後、学習経済論を経た牧口はそれも用いつつ「創価教育学」独自の価値論の構

築に進む。

牧口は『創価教育学体系』完成後の1936年の「四十五年前教生時代の追懷」の中で「創価教育学」の源泉（牧口 1982b : 412）が若き日の札幌時代にあることを明かしている。「創価教育学」の全篇を貫く思想の中核の様なものは「せつば詰まって考え出した」（牧口 1982b : 410）案の実践の中から生まれたものであった。そして牧口は学習経済論から創価教育学へと至る旅路を回顧している。「教育経済（教授力学習力経費時間）」が牧口の「価値観」である。これをもって「総ての教科に共通する教育原理の探究」となって「隠忍の二十年間」を経て、「創価教育学」が完成した（牧口 1982b : 412-413）。

10. まとめ

牧口は「西洋の諺に科学は知識の経済なり」等と述べて科学の経済原理を強調していたが、小論ではまずは経済学徒として、スミスの少数原理を紹介した。

斎藤が明らかにしたように、また牧口自身の述懐からも明らかのように、若き日から牧口は学習経済論に取り組んでいた。なお日本への学習経済論の流入はモイマンの著作によるところが大きいようであるが、これに対して牧口は斎藤が明らかにしたようにジョホノットの知識経済主義を含む教育理論から大きな影響を受けたようである。

小論が焦点をあてた「隠忍の二十年間」「思索的沈潜期」を含む中期においても牧口は学習経済論を積極的に展開し、その1つとして1919年刊行の一大論文集『学習経済論』に寄稿していた。小論ではその著作の概要をまとめ、当時の学習経済論の隆盛を確認してみた。その中で、経済学に関連した2本の論文を別途検討した。紀平正美は、スミスの『国富論』と経済学から経済概念の形成を考察しているが、歴史を重視して国家主義志向となっている。城戸幡太郎の教育価値論は経済学への接近を見せて興味深いものとなっている。そして牧口の寄稿した論文は1916年の『地理教授の方法及内容の研究』の「地理学通論」の簡略版・要約版・コンパクト版と呼んでよい内容であった。ただし第1次大戦後であり、大戦後のグローバリゼーションと日本の現状認識を示して、他の著作と同様に牧口の常に現状と対峙した姿勢が表明されて興味深いものとなっている。そして牧口は地理学にとどまらず教育学全体を射程に収めており、ここに新教育学構築への歩みの一端を確認できた。

最後に学習経済論が最終的に創価教育学として完成しているところまでを『創価教育学体系』により確認した。

注

- 1) 表記は『牧口常三郎全集』の「凡例」に従った。明治・大正期のその他の文献の引用もこれを踏襲した。
- 2) マッハの思惟経済に関しては、さしあたって『認識の分析』所収の「科学の基本的性格—思惟経済の体系」(マッハ 2002: 28-57) 参照。
- 3) 訳文は多少手を加えました。以下同様にてご容赦ください。
- 4) 「デカルトが実際にはこの方法を企てた最初の人物である。」(Smith 1983: 146 訳 251)
- 5) 斎藤はスミスの教育論に関して次のように述べている。「……スミスの全著作の随所に教育論ないし教師論が取り扱われているのである。『諸国民の富』のなかで二十数箇處に互って教育・教師・大学・学問^{めぐ}を繞る論議が提起され且つ展開されるのに邂逅するとき、ひとは更めて驚きの声を挙げるはずである。そのことに関して本稿筆者なりに作成した備忘録^{メモランダム}もある……」(斎藤 2004: 592)。斎藤のスミス教育論は第1編に止まっている。分業論の説明から始めて長文引用の結果、中心となる第5編まで筆が及ばなかったものと推察される。なおスミス教育論に関しては拙稿(坂本 2004、2011)を参照されたい。
- 6) 小林、稲垣、日田、富士川、小西、久保、および北澤。
- 7) 左右田の評価社会論については、『経済哲学の諸問題』所収の「未定稿価値論の一節」(左右田 1972a)と『貨幣と価値』の第2部「主張篇」(左右田 1928)参照。ちなみに牧口が左右田に言及するのは1936年『創価教育学体系』第2巻「価値論」(牧口 1982a: 205-206)である。次回詳細に取り上げる予定である。
- 8) 以下、『学習経済論』と『牧口常三郎全集 第七巻 初期教育学論集』の頁を併記する。
- 9) 左右田喜一郎に関しては、左右田(1972a、1972b)参照。次回詳細に取り上げる予定である。

参考文献

小論の構成上、牧口常三郎、『学習経済論』、およびその他の文献に分けて記す。

牧口常三郎の著作

牧口常三郎 1908『訂正増補人生地理学 全』(訂正増補第8版)、文會堂書店、富山房。

牧口常三郎 1981a『牧口常三郎全集 第三巻 教授の統合中心としての郷土科研究』、第三文明社。

牧口常三郎 1981b『牧口常三郎全集 第四巻 地理教授の方法及内容の研究』、第三文明社。

牧口常三郎 1982a『牧口常三郎全集 第五巻 創価教育学体系(上)』、第三文明社。

牧口常三郎 1982b『牧口常三郎全集 第七巻 初期教育学論集』、第三文明社。

- 牧口常三郎 1983a『牧口常三郎全集 第一巻 人生地理学 (上)』(初版)、第三文明社。
牧口常三郎 1983b『牧口常三郎全集 第六巻 創価教育学体系 (下)』第三文明社。
牧口常三郎 1984『牧口常三郎全集 第八巻 創価教育法の科学的超宗教的実験証明 創価教育学大系概論 後期教育学論集 I』第三文明社。
牧口常三郎 1996『牧口常三郎全集 第二巻 人生地理学 (下)』(初版)、第三文明社。

＊

『学習経済論』

- 教育論叢編輯部編纂 1919『学習経済論 一名 教育能率の増進に関する研究』文教書院
河野清丸「序言」ノンブルなし、4 頁分。
大瀬甚太郎「学習法概論」1-29
紀平正美「経済の概念」31-44
野上俊夫「学習経済の根本問題」45-59
小林澄兄「学習経済論」61-73
稲垣末松「学習の経済に就いて」75-89
谷本富「学習経済の新研究二・三」91-114
城戸幡太郎「教育価値論」115-150
日田権一「教育上より見たる学習作用の意義及び其の基本型式を論ず」151-185
富士川游「学習の経済」187-198
小西重直「学習経済の疑義」199-210
高峰博「学・習・教と子・家・師との問題」211-249
及川平治「動的教育と学習経済との関係」251-271
藤岡勝二「経済の観念」275-283
青木誠四郎「注意と学業成績との相関関係について」285-297
久保良英「学習に関する実験的研究法」299-310
田中寛一「経済的学習の一条件」311-334
氏原佐蔵「学習経済と保険問題」335-356
大島鎮治「理科教授に於ける学習経済問題」357-375
牧口常三郎「学習経済より見たる地理教授の改造」377-408
(牧口常三郎 1982b『牧口常三郎全集 第七巻 初期教育学論集』第三文明社、所収(369-394)。
中村久四郎「歴史教育及び学習につきて」409-440
水戸部寅吉「国語科の学習経済」441-476
生駒萬治「算術科の学習経済」477-482
北澤種一「修身科の学習経済」483-511

＊

- 小西重直 1912『現今教育の研究』同文館。

- 熊谷一乗 1994『創価教育学入門』第三文明社。
- マッハ、エルンスト 2002『認識の分析』廣松渉編訳、法政大学出版局。
- 乙竹岩造 1909『新教授法』目黒書店。
- 斎藤正二 1984a「補注」牧口常三郎『牧口常三郎全集 第八卷 創価教育法の科学的超宗教的実験証明 創価教育学大系概論 後期教育学論集Ⅰ』第三文明社、所収（435-472）。
- 斎藤正二 1984b「解題・Ⅰ」牧口常三郎『牧口常三郎全集 第八卷 創価教育法の科学的超宗教的実験証明 創価教育学大系概論 後期教育学論集Ⅰ』第三文明社、所収（473-505）。
- 斎藤正二 2004『斎藤正二著作選集 4 教育思想・教育史の研究Ⅱ』八坂書房。
- 斎藤正二 2010『牧口常三郎の思想』第三文明社。
- 坂本幹雄 2005「アダム・スミスの教育論」『通信教育部論集』創価大学通信教育部学会、所収（8：69-95）。
- 坂本幹雄 2011「アダム・スミスの教育経済学」『通信教育部論集』創価大学通信教育部学会、所収（14：27-46）。
- 佐藤秀夫 1982「解題」牧口常三郎『牧口常三郎全集 第七卷 初期教育学論集』第三文明社（423-460）所収。
- 下村寅太郎 1963「解題」田邊元 1963『田邊元全集 第二卷』筑摩書房、所収（663-678）。
- Smith, Adam. 1976. *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*. 2vols. R.H.Campbell and A.S.Skinner (eds.). Oxford: Oxford University Press. 水田洋監訳・杉山忠平訳『国富論』（全4冊）、岩波文庫、2000-2001年。
- Smith, Adam. 1980. *Essays on Philosophical Subjects*. W.P.D.Wightman and J.C.Bryce (eds.). Oxford: Oxford University Press. アダム・スミスの会監修、篠原久・須藤壬章・只腰親和・藤江効子・水田洋・山崎玲訳『アダム・スミス 哲学論文集』名古屋大学出版会。
- Smith, Adam. 1983. *Lectures on Rhetoric and Belles Lettres*. J.C.Bryce (ed). アダム・スミスの会監修、水田洋・松原慶子訳『アダム・スミス 修辞学・文学講義』名古屋大学出版会。
- 左右田喜一郎 1922a『経済哲学の諸問題 左右田喜一郎論文集 第一卷』岩波書店。
- 左右田喜一郎 1922b『文化価値と極限概念 左右田喜一郎論文集 第二卷』岩波書店。
- 左右田喜一郎 1928『貨幣と価値 論理的一研究』同文館。
- 田邊元 1963『田邊元全集 第二卷』筑摩書房。
- 渡部政盛 1923『教育学術問題批判』大同館書店。
- 渡部政盛 1925『学習の原理及其实態』太陽堂書店。

謝辞

私は数年前に牧口常三郎研究の新参者となりました。一連の牧口研究（本誌第22号、第23号等）に際して、牧口研究の大先輩である創価大学文学部教授の伊藤貴雄先生より懇切なご指導をいただきました。また東洋哲学研究所研究員の山崎達也先生から書誌情報・資料提供いただきました。末尾ながら記して両先生に深く感謝の意を表します。もちろんありうべき誤りはすべて筆者の責に帰すべきものです。